

言葉を失うとき

—相模原障害者殺傷事件から二年目に考えること—¹

渡邊 琢

◆ 津久井やまゆり園訪問

数カ月前、縁あって、津久井やまゆり園が谷園舎に入所されている一人の女性のもとを訪問する機会があった。二年前に一九名の入所者の殺人事件のあった相模原市の津久井やまゆり園はいったん閉鎖され、難を逃れた入所者のほとんどは横浜市内の芹が谷園舎に移転したため、その仮移転先へと訪れたのであった。

訪問はご家族の面会に同行するかたちだった。その女性は車いすに座っており、ぼくらが部屋に入ると興味深そうにこちらを眺めていた。近づいて話しかけると、不安そうな、おびえるような顔つきも見せた。語りかけても、言葉での返事は特に返ってこなかった。

少ししてから、みんなでちょっと施設の周囲を散歩することになった。車いすのベルトをとると、彼女は衝動的に歩き始めた。車いすから解放されたかったんだな、ご家族と一緒に外へ出たいんだな、そんなことを感じた。ベルトは、以前歩行中に転倒して腕を怪我したため、つけることになったそうだ。散歩は施設周囲をめぐる予定であったが、彼女はより遠くへ行きたい様子だった。結局、一〇分ほど外にいただけで、施設に戻ることであり、面会は終わった。

その後、ご家族から、その方のこれまでのエピソードを伺った。小学生のとき、英語で **What's your name?** と問いかけられ、**My name is ○○.** と答えたとのことだった。また、思春期のときに荒れて施設に入ったけれども、成人式のおりに一言求められた際には、施設職員や家族たちの前で、「明日も大事にしてください」と述べたとのことだった。その後、年齢を重ねるにつれてだんだんしゃべらなくなったそうだ。

彼女に会って以降、なにが彼女から言葉を奪ったのだろうかとしばしば思う。いったいどのような経験の中で、彼女は語る言葉を喪失していったのだろうか。そして今後彼女が言葉を取り戻していくことはあるのだろうか。

¹ この PDF ファイルは、雑誌『世界』（岩波書店）2018年8月号所収の原稿をテキスト化したもの。その後、若干の字句修正等を経て『障害者の傷、介助者の痛み』（2018年、青土社）に再録。

◆ 「意思疎通がとれない者」とは

繰り返し報道されたが、一九名もの障害者の殺人の動機は、障害者はいないほうがいい、障害者は不幸をつくる、という思いからであった。被告は、事件の数カ月前に衆議院議長に宛てた手紙では、「私の目標は重複障害者の方が家庭内での生活、及び社会的活動が極めて困難な場合、保護者の同意を得て安楽死できる世界です」とも述べている。犯行当日は、居合わせた職員を連れまわして「この入所者は話せるのか」と問いただしつつ凶行に及んだとも報道されている。犯行の意図としては、障害者全般がいないほうがいいというよりも、社会的活動が困難な者、意思疎通のとれない者がいない、というようにもとれる。

実際のところは、亡くなられた方たちが必ずしも意思疎通のとれない者、話せない者ではなかったことについては別のところですでに指摘した（渡邊琢「障害者地域自立生活支援の現場から思うこと——あたりまえの尊厳とつながりが奪われないために」〔『現代思想』二〇一六年一〇月号所収〕）。被告にそうした意図がある程度はあったにしても、犯行じたいはランダムに進行していったのではないかと思われる。ぼくが面会した女性の入所者は、家族の話によると事件当時たまたま入居部屋が目につきにくくて被告がその前を通過したために、犠牲にならずにすんだのではないか、ということだった。

被告の犯行の意図に関しては、事件後一年たってもその思いが変わっていないことが、報道各社に宛てた彼自身の手紙の中で確認できる。手紙には明確に「私は意思疎通がとれない人間を安楽死させるべきだと考えております。私の考える「意思疎通がとれる」とは、正確に自己紹介（名前・年齢・住所）を示すことです」と書かれている。さらに彼は、同じ手紙の中で「心失者」という言葉も使っている。ある取材に対しては、「事件を起こしたことは、今でも間違っていなかったと思います。意思疎通のとれない人間は“心失者”です。心失者は人の幸せを奪い、不幸をばら撒く存在です」とも述べている。

彼は、意思疎通がとれない人のことを、人間でないともみなしているようだ。しかし彼は、そもそも人間というものにはだれであれ、ある環境や条件のもとにおかれたら、意思疎通がとれなくなる存在、言葉を失う存在になりうる、ということを見落としているのではないか。言葉で話すことができていた人も、状況によっては話すことができなくなる。

あたり前のことだが、意思疎通をとる、話す、ということは、常に誰か相手に向けて行われる行為だ（「わたしがわたし〔という語〕を用いるのは、わたしがだれかに話しかけるときだけであり、そのだれかはわたしの話しかけのなかであなたとなる」〔E・バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』岸本通夫監訳、みすず書房〕）。意志疎通の成否は本人だけでなく対話相手にもかかっている。つまり、話す人のまわりに話を聞いてくれる人がいるのか、その人に配慮し、その人の意向をくみとってくれる人がいるのか、ということがいわば隠れた前提である。意思疎通は決して個人で完結する行為ではない。「意思疎通がとれない」とは、対話相手の不在を指す場合もあるかもしれないのだ。

◆ 言葉を失うとき

相模原の事件で、施設に入所している話せない人たちが狙われたと聞いたとき、ぼくはある悲しい思いにとらわれた。今、親元を離れて地域で支援を受けながら一人暮らしをしている重度重複障害の青年がぼくの身近にいるのだが、以前その青年が施設に入るかどうか、あるいは一人暮らしの可能性を探るのかどうかの岐路に立たされたとき、親が、「この子はできたら施設に入れたくない、施設に入れるとこの子は言葉を失ってしまう」と話していたのを思い出したのだ。彼はこれまで四肢麻痺の治療のため長期入院を何度かしたのだが、そのとき言葉を発さなくなり、意識レベルも低下してしまったことを親は言っていたのだ。

彼との付き合いは、一〇年以上に及ぶ。彼が高校生ときから、ガイドヘルパーとして週末の外出によく付き合っていたのだ。外出は繰り返し同じところに行きたがった。同じところにいき、そこにいる人に同じような質問をし、それで彼は満足しているようだった。質問内容よりも、質問の際の人とのやりとりに充実感を得ているようだった。施設に入ったら、毎週のように自分の行きたいところに外出し、その出先で会う人と会話のやりとりをすることは決して叶わなくなるだろう。

彼とのコミュニケーションは独特だ。話し慣れてない人に対しては、なかなか言葉が出てこない。独特の笑いのツボや怒りのツボがある。彼とぼくのやりとりを第三者が聞いたら、まじめに話をしているのか？ この支援、大丈夫か？ と思うかもしれない。彼は次々と話しまくる。ぼくはなんとなく受け流しながら、時にある笑いのツボを感じとったら、そこをきゅっと刺激する言葉を発する。すると二人の間で、ニタリとしながら目が合う。

このツボを感じとれない人とのやりとりにおいては、彼の言葉はだんだんとなくなっていく。そうした場合、彼の意識はだんだんと閉じていく。施設に入ったら、職員は常に仕事に追われている。たとえ職員が入所者とゆっくり会話がしたいと思っても、その時間はない。だれかある入所者と懇意に話していたら、他の入所者とのやりとりが蔑ろになる。施設という、外に出たくても自由に出られない閉じた空間の中で、語りかけても応答してくれる人がいないとき、人はどうなっていくだろうか。そのことについて、健常者と言われる障害のない人は、障害のある人以上に思いを馳せて、考え、想像力を働かすべきであろう。

健常者だから話せる、障害者だから話せない、というわけではない。ほとんどの人がある環境、状況に追い込まれたら言葉を喪失する。

第二次世界大戦下、ナチスの強制収容所に入れられた人は「人間」とはみなされなかった。私たちが日常で用いる「言葉」でもって話しかけられる存在ではなかった。言葉で語りかけられることはなく、家畜を追い立てるとき鞭や怒声、あるいは拳による強制のみがそこにはあった。「ゴムの鞭」が収容所の囚人に命令の意味を理解させる「通訳」とも呼ばれていた。強制収容所の生存者、イタリア系ユダヤ人のプリーモ・レーヴィは、そのよ

うに扱われる状況におかれた人々が急速に言葉を失っていった様子を次のように述べている。

「この「話しかけられない存在」であることは、迅速で破壊的な影響をもたらした。人は話しかけてこないものに対して、わけの分からない叫び声だけを投げつけてくるものに対して、あえて言葉をかけないものである。もしかたわらに同じ言葉をしゃべるものがある幸運に恵まれたら、それはとてもいいことだ。自分の考えを言えるし、助言を求められるし、心の思いを吐き出せる。もしだれもいなかったら、言葉は数日のうちに枯れてしまい、言葉とともに思考もしぼんでしまう。」(プリーモ・レーヴィ『溺れるものと救われるもの』竹山博英訳、朝日新聞出版)

そしてこのようにしゃべりあう仲間もおらず、言葉を喪失した者たちはまたたく間に体力、気力を喪失し、命を落としていったという。

人は誰であれ、人間的な応答のないような状況におかれたら、かなりの程度で言葉や思考をどんどん喪失していく。言葉や思考がしぼみ、心を失ったかのように人から見なされるようになったら、ますます非人間的に扱われる。そうして、ますます言葉や思考を失い、人間性を喪失していつてしまう。そこには、この社会において、ある人間から人間性を奪っていく際の悪循環が存在する。

プリーモ・レーヴィは強制収容所にいる人たちを、収容所の外の民間人たちがどう見なしていたかについて、次のように述べている。

「実際、民間人から見れば、私たちは不可触賤民だった。……彼らは、これほどひどい生き方を強いられ、こんな状態に陥るには、よく分からないが、よほど重い罪を犯したに違いない、と多かれ少なかれ考えていた。私たちがしゃべるいろいろな言語は彼らには分からないので、動物がほえるように異様に響く。また彼らは、私たちのおぞましいほどの奴隷状態を見る。……原因と結果を混同して、私たちはこうしたおぞましさにふさわしい存在だと判断してしまう。」(レーヴィ『これが人間か 改定完全版 アウシュビッツは終わらない』竹山博英訳、朝日新聞出版)

同様のことを障害者にあてはめて言えば、多くの障害者が施設に入所しているがゆえに、世間一般の人は障害者を地域では暮らし続けられない人と思ってしまうのかもしれない。障害者は世間から隔離された施設に入所しているがゆえに、世間に通用する言葉を失い、世間もその言葉を受けとれなくなってしまうのかもしれない。そうした「原因と結果」の混同を私たちが犯してしまっていないか、ふりかえってゆっくり考えてみないといけない。

◆ 言葉は取り戻されるか

そもそも人は、産まれたときは言葉をもっていない。赤ちゃんは言葉で何か意思を伝えることなく、まどろんだり、ニコニコしたり、ひたすら泣いたりするだけだ。それでも、まずたいいていの人は、赤ちゃんについて心をもたない存在とは見なさない。赤ちゃんが泣きわめいている姿に触れ、なんとかその意味を解釈しようとする。

ある児童精神科医は、養育者が赤ちゃんのことを（とりたてて根拠もなく）「こころをもつ存在」として扱うことによって、子どもは「こころをもつ存在」へと育っていく、ということについて次のように述べている。

「赤ちゃんが泣きだしたとき、養育者（親）はどう反応するだろうか。わが子の泣き声を、未分化な不快感覚への生理反応や受動的な反射に過ぎない、と考える親はいない。わが子から自分への「訴え」、つまり能動的なコミュニケーションとして受けとめるだろう。これは乳児を、すでに自分たちと同じように感じたり考えたり意志する存在、つまり〈こころ〉をもった存在として受けとめていることを意味する。

これは、親の「思い入れ」（感情移入）に過ぎず、「科学的」な認識としては正しくないのかもしれない。

けれども、こうした養育者の思い入れによってこそ、精神発達を支えられている。生まれたときから（いや、胎内にあるときから）すでに「こころをもつ存在」として扱われることによって、子どもは実際に「こころをもつ存在」へと育っていけるのである。」（滝川一廣『子どものための精神医学』医学書院）

これに対して、人が言葉を失っていく、心を失っていくとしたら、まさにこの過程とは逆のことが起きているのだろう。言葉をもつ存在、心をもつ存在として見なされない環境の中では、だんだんと心も言葉もしぼんでいってしまう。

「私たちの存在の一部はまわりにいる人たちの心の中にある。だから自分が他人から物とみなされる経験をしたものは、自分の人間性が破壊されるのだ。」（前掲『これが人間か』）

そのように破壊された状態から言葉を取り戻していくこと、心を取り戻していくということがありうるとしたら、まさに赤ちゃんがまわりの人たちによって「こころをもつ存在」として扱われることを通して自ら「こころをもつ存在」として育っていったように、まわりの人たちがその人たちのことを言葉をもつ存在、心をもつ存在とみなし、そのような存在として働きかけ、またその訴えに耳を傾け続けたいといけないうだろう。

ぼく自身は、これまで多くの人たちが言葉を取り戻していく過程、言葉を増やしていく

過程に接してきた。身体障害、知的障害問わず、同じようなことが言える。

幼児期から三〇年以上施設に入っていたある重度の脳性麻痺の方は二〇〇四年に、まわりから絶対不可能と見なされていたにもかかわらず、地域で自立生活をはじめた。当初はぼく自身もこの方の発話がほとんど聞き取れなかった。電動車いすも操作されていたが、ものすごい蛇行運転で、ガードレールや自転車によくぶつかっていた。それから十数年たち、多少の聞きづらさがあっても、その人の発する言葉で意味のわからない言葉は一つもない。会話のスピードも早くなった。電動車いすの操作も相当にまっすぐになった。

ある重度の知的障害の方は、オウム返しはいくらかあるが、自分から発話する語彙はかなり乏しかった。グループホームでは精神を病み、退所することになったので、支援を受けながらの一人暮らしをはじめることになった。最初の何年かは情緒がとても不安定で、しょっちゅう介助者に暴言を吐いたり、介助者をつかんだり蹴ったり、あるいは感情が崩壊したかのように泣き崩れたりしていた。騒音もひどく、近所からの苦情もかなりあった。けれども、一人暮らしも八年目。その過程には支援者たちの粘り強い関わりがあった。会話の場面場面に応じた語彙が非常に豊富になり、感情の激しい揺れも少なくなってきた。近所の苦情も止んできた。

重度の知的障害者、自閉症者たちの地域自立生活の姿を描いた映画『道草』（宍戸大裕監督）がまもなく一般公開される。そこでは次のような自閉症者の母親の言葉が紹介されている。

「表情がすごく豊かになったなと思うのと、言葉がすごく増えたし、楽しいなと思っている瞬間が増えたので、親としてはすごく安心。自分の話を聞いてもらえて、それを返してもらえるとという経験がすごく大きいのかなと思っている。」

ここで語られている自閉症の方は、子どもの頃から施設に入り、自傷行為がひどくなり、精神病院にも何度か入院したそうだ。親には、かむ、ける、頭突くのオンパレードだったらしい。今、支援を受けての自立生活をはじめて三年。日常は介護者たちと過ごし、自傷行為はほとんどなくなったそうだ。それを受けての上記の母親の言葉だ。

環境や状況、まわりの人々の関わりによって、人は言葉を失っていくこともあるし、また言葉を増やしていくこともある。そのことをぼく自身は日々まざまざと感じている。

冒頭で、津久井やまゆり園に入所しており、言葉を失った女性が「今後言葉を取り戻していくことはあるのだろうか」と問うた。ぼく自身の感覚では、彼女を障害者ではなく人と見なし、また「こころをもった存在」と見なし、そのような存在として働きかけ、その発する意味を聞き取るよう努めていけば、いつかきっと言葉を取り戻していくと思う。

◆ 津久井やまゆり園入所者たちの今

二〇一八年六月一日の神奈川新聞に「やまゆり園入所者が地域生活 事件後の意向確認で初」と題する記事が掲載された。やまゆり園に入所していた平野さんという二八歳の男性が、五月三日、市内の社会福祉法人の支援を受けて、グループホーム（GH）での生活をはじめたということだ。「県によると、施設を出て少人数のGHなどで暮らす「地域生活移行」は、県が事件後に入所者の意向を確認する機会を設けてから初めて」と書かれている。

まもなく事件が起きてから二年が経つ。事件直後から、入所施設という構造がこの事件を起こした遠因でもあるのではないかと、という指摘が相次いだ（事件から一〇日ばかりで書いた渡邊琢「亡くなられた方々は、なぜ地域社会で生きることができなかったのか？—相模原障害者殺傷事件における社会の責任と課題」(SYNODOS)でも、そのことを指摘した)。津久井やまゆり園という大規模入所施設の再建ではなく、入所者たちの地域生活移行を、という声が多く、障害者団体からあがった。その声におされて、大規模入所施設の再建という当初の県の案はなくなり、施設の小規模分散化と、入所者たちの地域移行の推進、ということで方向性は定まっていた。

右記記事によると、事件当時の入所者は現在一二六名いて、その個々人に対して、地域移行に関して入所者たちの意向を確認し、また専門家等もまじえて話し合う場として「意思決定支援検討会議」が開かれることになる。しかし、その会議はいまだ一三名の入所者たちに対してしか開かれていない。そして、二年近くたってようやく初めてグループホームへの移行者があらわれたということだ。

はじめて地域移行者があらわれたということは、「施設から地域へ」の初めの一步として、とても大事な出来事であると思う。けれども、この歩みの遅さは、あまりにも重たい現実ではないだろうか。なぜ地域移行ということはこれほど進みがたいのだろうか。おそらくそこには様々な要因があるだろう。

地域で支えていこうとする志のある担い手があまりにも少なく、そのため多くの地域で施設入所の選択肢しかないという現実のあること。重度の障害者たちを地域で支え続けるための長時間介護を保障するなどの政策的支援を行政が怠っていること。施設職員が日々の支援に追われてとても地域移行のことまで考えられないこと。そして、入所者自身やその家族、さらに行政職員や福祉関係者が障害者の地域生活のイメージをほとんどもてないこと。家族か施設かが支えるしかなかった長年の過去がある以上、重度障害者にとって別のかたちの新しい生活がありうるとイメージできる人は、残念ながら現在でも本当にごく少数である。

「意思決定支援」はもちろん大事だけれども、その言葉だけでお茶を濁してはダメなのだと思う。意思というのは意欲の対象を目指して働くものだ。長年、施設の中でのみ暮らし続けていて、どうやって新しい暮らしの場という意欲の対象をもつことができるだろう

か。私たちは、入所者たちから長年にわたって地域社会での経験を奪ってきたことに対して、思いを馳せなければならない。その上で、入所者たちがそうした地域社会での経験を新たに積んでいくための地道で具体的な実践が伴わなければいけない。施設という閉じた空間の中で、意思決定支援をどれだけ行っても、次への展望はなかなか開かれまいだろう。

◆ 深い傷を負った人々

最近、別のところで、「支援・介助の現場で殺意や暴力と向き合うとき——社会の秘められた暴力と心的外傷（トラウマ）について」という文章を書いた（青土社より今秋刊行予定の拙著に収録予定）。

ぼく自身も、障害のある人と関わる中で、本当にしんどい、困難だ、と思うことはある。その文章のタイトル通り、障害のある人からの殺意や暴力に向き合うこともまれにある。きれいごとではとてもすまない状況だ。けれども、そういう状況とも向き合わなければ、「共生社会」などと軽々しく言えないし、そうした状況をなんとか理解し、そこに言葉をあて、今後の展望へとつなげていくために、右記の文章を書いた。その作業は正直、ぼく自身の中にもあるおぞましい感情にも向き合いつつ進めざるをえなかった。

先に紹介した映画『道草』でも、他害行為があり外出そのものが難しく、また介護者にも殺意をむき出しにする方が登場する。施設においても地域社会においてもきれいことではすまない支援の現場は確かにある。

そうした困難な現場を理解する際のカギとなるのがトラウマ（＝心的外傷）だということに、ジュディス・ハーマンによって書かれた『心的外傷と回復』という本を読んで初めて気が付いた。先述の拙文は、『心的外傷と回復』に大きく依拠して、障害者の常軌を逸したかのような行動や、それに向き合う介護者の心の動揺やしんどさを読み解いていったものだ。

障害をもつ人に対するトラウマの影響については、たとえば自閉症研究の第一人者、杉山登志郎さんも次のように述べている。

「私は、ごく最近になって、自閉症の転帰を決定的に不良にするものはトラウマであることに気付いた。強度行動障害への治療は、トラウマへの対応という視点で突破口が開けるのではないか。長期転帰を不良にしないための対応と同時に、すでに成人期を迎えている彼らへの具体的な方法について、試行錯誤がつづいている。」（杉山登志郎『杉山登志郎著作集①自閉症の精神病理と治療』日本評論社）

トラウマによって心身に大きな変容をもたらす PTSD の主要症状には、過剰覚醒、侵入

症状、^{きょうまう}狭窄（回避行動）の三つがあると言われている。「殺意や暴力」をテーマとした右記拙文では、三つのうちの過剰覚醒と侵入症状の側面について主に取り扱ったのだが、狭窄（回避行動）についてはほとんど触れることができなかった。

過剰覚醒や侵入症状は他者の目に付きやすく、また他者を途方もなく巻き込んでいくような症状であるのに対して、狭窄は全く逆に他者との関わりを自ら断ち、自分で自分の殻の中に閉じこもっていく症状である。

前者は確かに手に負えないような状況を生み出し、そこに関わる人たちもそれ相応に心に傷を負うことになる。けれども、その症状は他者に何かを訴えるメッセージをもっている。

しかし後者の狭窄は、その他者へのメッセージを完全に閉ざしてしまう。他者が放っておけば、そのまま孤立の中に沈むだけであり、ひょっとしたらそのままだれにも顧みられることなく人生が終わってしまうかのような症状である。見方によっては、もっとも深刻な症状なのかもしれない。

今回の文章の主題であるような「言葉を失う」ということ、思考や意欲がしぼんでしまうということは、この「狭窄」からも説明できるのだと思われる。

『心的外傷と回復』の「監禁状態」という章の中で、狭窄や回避について、次のように述べられている。

「慢性外傷を受けた人においてもっとも劇症となる PTSD 症状は回避あるいは狭窄である。被害者がただ生きのびることを目標とするまでに追いつめられると、心理的狭窄は適応不可欠な形式となる。この狭めは生活のあらゆる面に対して行われる。対人関係も活動も思考も記憶も情緒も感覚さえも狭くなる。この狭窄は監禁状態に対しては適応的であるといっても、やはり抑圧された心理能力には一種の萎縮が起こり、また内面生活の孤独が大きくなる。」（ジュディス・L・ハーマン『心的外傷と回復 増補版』中井久夫訳、みすず書房）

長期にわたり外部との接触がなく、自分で自分の生活をコントロールできない状態におかれると、慢性外傷を被ることになり、「対人関係も活動も思考も記憶も情緒も感覚さえも狭くなる」と言われる。

多くの施設入所者がこうした状態におちいていないか、十分に検討されるべきだ。言葉があった人たちが、施設に入ることによって言葉を失っていく。そして思考や意欲も減退させていく。そうして場合によっては「原因と結果」が混同され、心を失った存在とさえ見なされる。そこでは、社会の暴力が彼らの身にふりかかっていることに私たちは気が付くべきではないだろうか。意思決定支援をしても、意思が読み取れませんでした、地域移行は難しいです、ということですむ話ではないはずだ。

言葉を失い、沈黙の中に沈んでいった人たちへと本当に思いを馳せなければならない。

一度負った深い傷は、そう簡単に回復するものではない。しかも長期にわたって負わされ続けた傷はなおさらそうであろう。深い沈黙の中に沈み続けている者もいるに決まっている。

私たちは、その沈黙にこそ耳をすまさねばならないのではないだろうか。その沈黙こそが多くを語っているのではないだろうか。

言語哲学者ダニエル・ヘラー＝ローゼンは、「言語の忘却について」という副題をもつ著書の中で、そうした沈黙に思いを馳せ続けることの大切さを示唆しているように思われる。

彼は、フロイトの失語症論を取り上げつつ、次のように論じる。

失語症患者は話せなくなった後も、自分の人生においてもっとも重要な役割をはたした会話や簡単な断片を口にすることがあるという。それは「ちくしょう！」というような「エネルギーに満ちた罵倒語」であることもあるが、「助けて」であったり、「リスト完成」（目録作りの仕事の後に失語症になった患者の例）であったりする。彼らは他のあらゆる文章に代わり、その人生がそこに集約されうるような一つの表現に永遠にとどまり続ける。失語ということは、忘却の一形態ではなく、「鋭い記憶の一形態」とも言われる。言葉を失うとき、彼らは私たちが記憶の彼方においやったものを思い出し続けているのかもしれない。

「そうであれば、話者の行為を評価することは難しくなる。話せる者たちと話せない者たちについて性急な判断をするのは軽率に過ぎるだろう。誰がより多く、誰がより少なく物事を行っていることになるのか。思い出すことができるが話せない者か、それとも忘れるがゆえに話す者だろうか。」（ダニエル・ヘラー＝ローゼン『エコラリアス 言語の忘却について』 関口涼子訳、みすず書房）

言葉を失ったからといって、そこになにもなくなっただと思っただけではない。言葉にするのが困難になっても彼らは大事なことを思い出し続けているのかもしれない。彼らは言葉を失う代償として、私たちがそんなことがあったとは知らなかったようなことまで記憶しているのかもしれない。

言葉を失った人たちの言葉は時宜に応じて取り戻されることもあるし、取り戻されないこともある。いずれにせよ、彼らとのつながりを断ってはならないし、そして、彼らの思いや記憶は、たとえ彼らの口から語られることがなくとも、わたしたちがたえず想起し、そこに思いを馳せ、語り続けねばならないことではないだろうか。